

# 島のむんがたり

亀津中区、旧徳之島警察署跡（現合同会館）裏通りのある屋敷の南角ブロック塀隅に、高さ約1.5mの石碑が建っているのが「滄浪の井記碑」である。そこには



【滄浪の井記碑】



【「滄浪の井記碑」の建つ合同会館裏通りの倉庫敷地】

「滄浪の井記」碑について  
↳ 代官所井戸跡に残る美女伝説

『アンガサレ（島妻・妾）の悲哀の物語』があった。

昭和40年「徳州新聞」に「碑」にまつわる記述があり、それによって「滄浪の井記」について紹介してみたい。

石碑の立っている所には古くから井戸があり、藩政時代この井戸の前、旧徳之島警察署跡に代官所の御座（事務所）があり、大飯屋と呼び代官の官舎にもなっていた。炊掃婦をおいて食事洗濯にあてこの井戸水を専用した。炊掃婦には専ら炊事・洗濯にあたる女と、代官の現地妻や妾になる女とがいた。

現地妻や妾は「アンガサレ」といって夫役徴用を免れ、横目役でないときかない銀かんざしを髪にさし、その給料は地元負担（島持ち）というであった。伝説によると、『昔、亀津に相

愛の夫婦があり、その妻の美女が代官の命令でアンガサレに強制徴用されたので、美女はその晩に床を抜け出しこの井戸に投身自殺した。村の人たちがこれ

を憐れみ水祭りをしたが、代官所の炊掃婦はこのことがあってから大瀬川の上流から水を汲んで御用をしたという。

「滄浪」の語は、人間の生き方のありようの例えに使われる言葉で、中国戦国時代の政治家で詩人の屈原が詩「漁夫の辞」に取り込んで歌っている。ちなみに、屈原は流浪の果て川に身を投じて自らの命を落とした。

薩摩藩政の下、自分ではどうしようのない身と世の中をはかなんで、井戸に身を投じたアンガサレの伝説を知り、この後に代官に着任した漢学に素養のある武士が「滄浪の井記」と書き遺したのではあるまいか。

石碑は建ててから相当の年数が経っており摩滅して、わずかに「滄浪井記」の文字が判読できる程度である。町民の皆さんもこれを機会にぜひご覧になって、薩摩藩政下の島民の心に思いをはせてみては…。

（町誌編さん室 岩下洋一）

問 郷土資料館

☎ 0997-82-2908